

〈書評〉

エッカート・フェルスター著

『哲学の25年——体系的な再構成』

(三重野清顕・佐々木雄大・池松辰男・岡崎秀二郎・岩田健佑訳、法政大学出版局、2021年)

勝西 良典

本書は2011年に出版されて翌年に英語に翻訳され、2017年にハイデルベルク大学よりクーノ・フィッシャー賞を授与された、*Die 25 Jahre der Philosophie: Eine systematische Rekonstruktion* の全訳である。「哲学の25年」とは、第一批判第一版が出版された1781年から、ヘーゲルがイエーナ大学で講じた最初の哲学史講義(1805/6年の冬学期)において哲学史の終わりを告げたと著者が考えている1806年春までの25年である(1-2頁)。これ以前やこれ以降にもあれやこれやの哲学が存在するだけでなく、哲学的思考の歴史は有史以来脈々と受け継がれてこれからも進展していくと考えられるにもかかわらず、「批判哲学の成立以前には哲学はまだまったく存在しなかった」(VI, 206)というカントの言葉と、「これをもって、こうした哲学の歴史は完結した」(W 20, 461)というヘーゲルの言葉を真に受けることで成立する、哲学に関する一個の思想を明らかにしようとするのが、より厳密に言えば、こうした思想を形成する思考の道筋を改めて辿りなおすことによってその理念を明らかにしようとするのが本書であり、そのため本書は、この理念固有のダイナミズムを概念把握してその内在的展開とともに遂行することに心血が注がれている骨太の著作になっている。本書評では、紙幅と評者の能力の関係上、大半の影響作用史や『精神現象学』の構想変更などの詳細については三重野氏の手になる訳者解説に委ねることとしたい。

本書は、哲学に帰結を与えたカントの思考(第一部)と、前提たる第一原理を明らかにすることによってカントの仕事を終らせようとしたドイツ観念論の思考(第二部)を再構成したもので、前後にプロローグとエピローグがつき、プロローグの前には、上述の執筆意図ないしタイトルの説明に費やされた序が付されている。

哲学は学としての形而上学の可能性を問う超越論的哲学として始まる。哲学の抱える課題は非経験的な対象に関して真なる言明をすることだが、そのためには古典的な存在論では事物一般として前提されもする客観を捨象し、形而上学的思考を遂行する理性自身を探究することによって対象(指示)関係の真理性が基礎づけられねばならない(プロローグ)。したがって第一批判は、感性・悟性・理性という3つの認識能力についてアприオリな表象を導出し(形而上学的演繹)、その網羅性を証明し、対象との関係を保証する(超越論的演繹)という構造を取る(第1章)

こうした超越論的哲学の最初の構想は、「ゲッティンゲン書評」とガルヴェの批判によって不十分なことが明らかになり、外官の対象を構成しうることを証明することと、道徳性の最高原理の探求と基礎づけがこれに加わることになり(第2、3章)、超越論的哲学の一般的課題は、アприオリな総合命題の可能性を探求することとなる。こうした変更に伴って認識能力や欲求能力以外に快・不快の感情についてもこの課題を適用できるというアイデアがカントに到来し、第一批判第二版が出版される頃には、超越論的哲学は三批判が担う三部門からなる体系へと拡張されることになる。そして、第一批判が開いた、現象と物自体の超越論的区別に起因する感性界と知性界という二世界の分断が、第二批判でも、自然の叡智的な創造者たる神(そして自由と不死)を要請

するという、非理論的・実践的解決しかもたらされないため解消されることはなく、理論理性の立法と実践理性の立法の非結合的両立は、理論的認識レベルではアンチノミーを形成する矛盾として了解されている(第5章)。この解決を担うのが第三批判である。

この間に超越論的哲学の対抗馬として浮上してくるのがスピノザ哲学である。著者はゲーテとの第二のスピノザ論争も取り上げ、ヤコービに対するゲーテの異論に高い評価を与えている。ヤコービがスピノザの「精神」を「無からは何物も生じない」に見ることでこれを原因性の原理による理性の合理的認識へと縛りつけているのに対して、ゲーテは「直観知」を最高位に置いたことこそがスピノザの意義だと考え、自己原因である実体の十全な認識の下で個々の事物の本質を十全に認識すること、すなわち個々の事物から出発してその真の根拠である内在的原因性を観察することこそが自然=精神を学的に理解することだと見なした(第4章)。

第三批判は、美に関わる判断の主観的普遍性を証明する中でこの判断の対象がカテゴリーに尽きない解釈の多様性(構想力と悟性の自由な戯れ)を許すことを認め、機械論的自然観に尽きない目的論的自然観が規定的・構成的ではなく反省的に可能であることを証示する。これによって現象の超感性的基体においては理論理性の立法、実践理性の立法、及びこれらの立法と一致するかぎりでの自然の合一が可能となり、理性が自分自身と一致するようになる。超越論的哲学はこうして、「外官の対象において自らの基礎を、そして超感性的なものにおいて自らの内的な統一の条件を有している」(591頁)という自己理解に到達するのである(第6章前半)。

だが、カントにあっては超感性的なものと感性的なものとの必然的なつながりはあくまで思考可能なかたけであって、これを認識することは、「論証的悟性」しか持たない人間には不可能である。カントはこうした人間の限界を描出するために第三批判第76節と第77節で、人間を超えた能力を想定してこれと比較する論法を取り、知的直観、神聖な意志、直観的悟性について語る。こうした能力を人間は実現できないが、カントにあってはこれらを思考することはできるのである。ここで語られている2つの非論証的認識能力、すなわち直観的悟性と知的直観を著者はさらにそれぞれ、「(a)根源的・自己直観的な悟性(すべての可能性の根拠)としての直観的悟性」と「(b)総合的に普遍的な悟性としての直観的悟性」、及び「(a)可能性(思考)と現実性(存在)との産出的統一としての知的直観」と「(b)物自体についての非感性的直観としての知的直観」に区分し、カントからドイツ観念論への遺産(「概念の武器庫」(244頁))として位置づける。これらはカントにあっては限界概念であったが、こうしたものを思考可能であるという一点を縁に、これらの能力は果たして本当に実現不可能なのかという問いが立てられるのである(第6章後半)。そしてその答えはこうなる。知的直観は自我の自己直観において実現可能である(フィヒテ)。また、直観的悟性は自身の自然研究において実現されている(ゲーテ)。こうしてドイツ観念論において超感性的なものの認識可能性が正面から主に(a)を基調にして問われることになるのである(第7章)。

フィヒテの試みについては、『全知識学の基礎』の概説が展開される。自己指定と自己認識を本質とする自我は、自らの存在を自らの自己指定の所行として認識する(産出的・知的直観=思考と存在の統一の意識)。そして、自我の合法的行為は超感性的な自我の感性化としての自己指定であり、一步一步意識化され認識されることになる。こうして、自我においては超感性的なものと感性的なものが結び付けられ、実践理性と理論理性が合一するのである(第8、9章)。

第三批判第76節にスピノザの神即自然と同種の響きを聴き取る(第9章VI)シェリングは、フィヒテの知的直観を自然哲学の根底にも置かねばならないと考える。だが、自然においては、産

出するものが自然自身であるため、産出的でもある知的直観は不可能である。したがって、直観する者ないし思考する者は産出・創造の場から締め出され、せいぜいのところ直観的悟性しか持てなくなるだろう(第10章)。

スピノザ主義者ゲーテは第三批判の直観的悟性が直観知の方法論を築く礎となると考え、論証的悟性を直観化し、相互に関連した諸現象をとりまとめて一つの全体を形成するように把握するとともに、諸現象間の諸々の「移行」を思考の上で追形成しこれらが起因する理念的な全体としての理念を見出すことによって全体と部分の関係が外的なのか内的なのかを理解する方法を練り上げた。全体がすでに形成作用を行うように機能している(内的)と理解できれば、諸現象間の諸々の移行が起因する理念的な全体としての理念は、経験可能なものとなる(第11章)。

ヘーゲルは『精神現象学』でこの方法を哲学そのものへと適用した。哲学的意識は知の要求とともに登場する意識なので、諸々の意識の形態をリスト化し、これらの間の移行を追体験[追遂行]することで一つの(歴史的)知を形成する。ただし、この知は意識自身が産出したものではない。ヘーゲルはおそらく「第二序論」のフィヒテのアイデア(GA I/4, 209-10)を修正するかたちで、それ自身で運動する精神の運動の系列と、この運動が唯一現象する思考する主体の意識の系列を区別することによって、超感性的な精神的実在性を客観的なものとして担保した。こうして意識は「直観知」の立場に立つことになる(第12~14章)。

こうしてカントの立ち上げた超越論的哲学はヘーゲルによって理念の認識としての学に高められたが、この完結はヘーゲルが構想していたように(a)理念から現実の实在哲学の体系へと至る上からの道を用意するのではなく、(b)具体的な諸現象から対応する理念へと至る下からの道=ゲーテの道に開かれているとされ、カントが(a)で思考可能なものとして叙述した自然の叡智的な創造者たる神の思考の名残を留めたヘーゲル哲学は破棄され、(b)の意味での直観的思考のポテンシャルを解明する哲学が開始されたばかりであることが告げられる(第14章Ⅶ~エピローグ)。

このように本書がヘーゲルをもって哲学の終わり=新たな始まりと見ることができたのは、ここで紐解かれる「哲学」が、カントの魂・世界・神という理念に働き所を与えていないことから予想されるように、フィヒテやシェリングの哲学の中後期の展開、すなわち宗教哲学を排除しているからである。ヘーゲルに関してもキリスト教的表象を取り除くかたちでその哲学を再構成しており、ヘーゲルにもあるはずの、表象の媒介機能と外部性開示機能=超越への開けが本書のテーマになることはない。人間の直観を感性的なものに制限することによって理性と理性の外部の関係の根源性を主題化したカントの醍醐味などまるでないかのように、超感性的なものを認識可能にする思考、すなわち主観と客観の対立が廃棄された理念の認識を彫琢しようとする。このときこの超感性的なものは、感性を超えたものではあるものの、理性を超える理性の他者ではなくなるだろう。ゲーテが見たスピノザには知性を改善することによっても見ることはできないかもしれない実体の属性があると考えているスピノザはいないことも付け加えておこう。こうした他者への崇敬の念の欠落が、師であるストローソンやヘンリッヒの分析の背後に实在論的志向があると斥けておきながら(43頁、47頁注13)、感性的諸印象を非結合性としてしまっている悟性の働きを見過ごすことによって思考可能性と現象の現実性の区別を危うくし、結果として主客未分の素朴实在論に加担してしまっている自分に気づけない愚かさを招来しているのではあるまいか。

末筆になるが、本訳書の丁寧なお仕事に感謝したい。若干の誤植や誤訳、訳語の統一の不徹底や原著の明らかな誤植の未訂正もあるが、それを超えてあまりある価値が本訳書にはある。